法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-01-15

黒人女性史研究におけるインターセクショナリティの再検討 : アイダ・B・ウェルズを例に

岡本, 美貴 / OKAMOTO, Miki

(出版者 / Publisher)
法政大学国際文化学部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
Journal of Intercultural Communication / 異文化. 論文編
(巻 / Volume)
23
(開始ページ / Start Page)
111
(終了ページ / End Page)
126
(発行年 / Year)
2022-04-01
(URL)
https://doi.org/10.15002/00025972

〔論文〕

黒人女性史研究における インターセクショナリティの再検討

― アイダ・B・ウェルズを例に ―

岡本　美貴
OKAMOTO Miki

はじめに

近年、黒人女性活動家アイダ・B・ウェルズ（Ida B. Wells, 1862-1931）と彼女の功績の記憶が人々の間で呼び起こされている。アイダ・B・ウェルズとは、1890年代から 1920 年代にかけて、反リンチ活動家として知られ、革新主義期のアメリカ合衆国において公民権や女性参政権をはじめとする黒人の平等のために闘った黒人女性である。しかし、晩年は人々の記憶から消えていき、1931年に亡くなった時には、地元紙以外に死亡記事さえ掲載されなかった。今日、ウェルズの功績が公的記憶として人々の間に蘇っている背景には、アメリカで頻発する黒人に対する白人警察による暴力事件や、前トランプ政権下での社会的分断状況がある。そのような中でウェルズの反リンチ活動が再び注目を集めている。2016年に開館したワシントンD.C.の国立アフリカ系アメリカ人歴史文化博物館（The National Museum of African American History and Culture）には、ファウンディング・ウォールとして知られた碑文が書かれた壁がある。その壁には、独立宣言から始まり、ウェルズによる「不正を正す方法は、真実に光を当てること（The way to right wrongs is to turn the light of truth upon them）」という言葉が書かれている[1]。また、ニューヨーク・タイムズ紙の「見

過ごされてきた（Overlooked）」人々シリーズにおいても、リンチ事件を報道し、深南部の人種差別に挑んだ人物としてウェルズは掲載された。[2]

こうした反リンチ活動家として全国的な注目を集める以前から、ウェルズの名前は少しずつシカゴの黒人コミュニティの中で語られるようになっていた。そのきっかけとなったのは、1988年のアイダ・B・ウェルズ・メモリアル・ファウンデーション（The Ida B. Wells Memorial Foundation）の設立[3]であった。またシカゴにおいて2002年から2011年にかけて老朽化し一時はスラム化したアイダ・B・ウェルズ・ハウジング・プロジェクトの取り壊し[4]の中で、ウェルズの名前が人々の間で思い起こされていった。さらに2019年にはシカゴのダウンタウンにある大通り、コングレス・パークウェイ（Congress Parkway）がアイダ・B・ウェルズ・ドライブ（Ida B. Wells Drive）に改名された。[5]当時、シカゴ市長候補であったトニー・プレックウィンクル（Toni Preckwinkle）はウェルズの名前にちなんだ大通りの改名を以下のように語った。

> 社会は彼女（ウェルズ）の運命を、脇に追いやられ、声もなく、名前も忘れ去られる人生として決定づけられたものと思っていた。しかし今日、シカゴはアイダ・B・ウェルズの名前を永遠に知ることになる。彼女はアメリカの顔に鏡を当て、その罪を世界に向けて明らかにし、同時に変化を求めた。[6]

シカゴの黒人コミュニティでこのように語られた背景には、ウェルズが、故郷の南部のメンフィスから北部のシカゴに移住した後、セツルメント活動、社会福音運動、女性参政権運動、ジャーナリズムなど革新主義期を代表する社会改革運動に積極的に取り組んだことがある。[7]しかし、昨今の公的記憶におけるウェルズの復活やアメリカ黒人女性史分野におけるアイダ・B・ウェルズ研究においても、焦点は

彼女の反リンチ活動に当てられてきた。一方、ウェルズは革新主義期アメリカの社会運動に熱心に取り組んだにも関わらず、社会運動史研究では、白人中産階級の活動が中心に取り上げられてきた。いくつかの評伝を除き、ウェルズのシカゴ移住後の社会改革運動については取り上げられていない。

では、なぜウェルズのシカゴでの社会改革運動は注目されないのか。ウェルズの活動が等閑視される背景にあるのは何か。そして、革新主義期の北部シカゴにおけるウェルズの活動を分析していくには何が必要なのだろうか。この問いに答えるために、本稿では近年のブラック・フェミニズム研究における、人種・ジェンダー・家父長制の視点、さらに分析概念としてのインターセクショナリティ（Intersectionality）について検討していきたい。

1．ブラック・フェミニズム

ブラック・フェミニズムの思想家で社会学者のパトリシア・ヒル・コリンズ（Patricia Hill Collins, 1948-）によると、ブラック・フェミニズム理論は、黒人女性が性差別、人種差別、階級差別による悪影響を受けていると主張する[8]。さらに、フェミニストであり、社会活動家でもあるベル・フックス（bell hooks, 1952-2021）[9]は人種差別、性差別、階級差別が同じヒエラルキーのシステムであり、それは「帝国主義的な白人至上主義の資本主義的な家父長制」[10]として相互に依存しているため、人種差別や性差別を単独で経験する以上の何かを生み出すとしている。

ブラック・フェミニズムという用語は1970年代に使われ始めたが、その概念は奴隷制時代から黒人女性が育んできた活動を指す[11]。1851年、奴隷として生まれたソジャーナ・トゥルース（Sojourner Truth, 1797-1883）は「私は女ではないの？（Ain't I a Woman?）」と後に題された即興の演説を行い、黒人女性の社会的平等を提唱した[12]。その

後も、メアリ・C・テレル（Mary C. Terrell, 1863-1954）[13]やファニー・B・ウィリアムズ（Fannie B. Williams, 1855-1944）[14]、アンナ・ジュリア・クーパー（Anna Julia Cooper, 1858-1964）[15]などが、続くように黒人女性の社会的平等を主張した。しかし1920年代に入ると、その後1960年代半ばまで、黒人女性の指導者たちは女性の権利を唱道しなかった。というのも、当時は女性参政権運動として、投票権の問題を強調していたために、1920年代に白人中産階級の女性が中心であった女性有権者同盟（League of Women Voters）等が、女性差別はもうなくなったと宣言してしまったからである[16]。1960年代に入っても黒人女性は、その人種ゆえに、白人中産階級女性が主流のフェミニズム運動から排除され、同時にその性別ゆえに黒人解放運動からも排除されていた。1970年代から1980年代になると、ブラック・ナショナリズム[17]（Black Nationalism）、ゲイ解放運動（Gay Liberation）、第2波フェミニズムにおける黒人女性の役割を扱うグループが結成された。とはいえ、黒人女性の組織は、第2波フェミニズムから派生したものではなく、彼女たちは独自のポリティカルな組織を形成していった[18]。また、ジューン・ジョーダン（June Jordan, 1936-2002）による『シビル・ウォー（*Civil War*）』（1981年）やオードリー・ロード（Audre Lorde, 1934-1992）による『シスター・アウトサイダー（*Sister Outsider*）』（1984年）といった、後にインターセクショナリティと認識される概念に関する研究が発表されるようになった[19]。さらに1990年代に入ると、アニタ・ヒル（Anita Hill）論争[20]も起こった。

フェミニスト運動史家のミッキ・ケンダル（Mikki Kendall, 1976-）が言うように、メインストリームのフェミニズムは一般的に特権を持つ人々、つまり白人中産階級女性のためのジャンルである[21]。そういったフェミニストたちが、重きを置いているのは、白人中産階級女性の関心事や快適さであり、それは他の有色人種の女性の犠牲の上に成り立っている[22]。ブラック・フェミニズムは、こうしたメインストリー

ムのフェミニズムに疑問を呈する形で登場した。このようなブラック・フェミニズムの歴史を土台にして、インターセクショナリティという視点が概念化されていった。

2．インターセクショナリティ

パトリシア・ヒル・コリンズによると、インターセクショナリティとは、「交差する権力関係が、様々な社会にまたがる社会的関係や個人の日常的経験にどのように影響を及ぼすのかについて検討する概念」である[23]。さらに、分析ツールとしてのインターセクショナリティは、人種、階級、ジェンダー、セクシュアリティ、民族、国家、能力、年齢などが、別々に独立した相互排他的な存在としてではなく、むしろそれぞれを土台として相互に作用し合っているという洞察を意味するという[24]。1960年代から1970年代に起こった社会運動は、それぞれが人種・ジェンダー・階級といった単一のカテゴリーを、他のカテゴリーよりも優先して分析されてきた。公民権運動では人種が、女性解放運動ではジェンダーが、労働組合運動では階級が優先された。とはいえ、黒人女性は、黒人であり女性であり労働者でもあった。こういった問題を解決するために、黒人女性は分析ツールとしてのインターセクショナリティを用いていくようになった[25]。

とりわけこのインターセクショナリティの視点は、2020年5月に白人警官による暴力的な拘束方法によって殺害されたジョージ・フロイド（George Floyd）事件をきっかけに再燃したBlack Lives Matter（以下、BLM）にも明確に見られる。BLMのサイトには、運動の目的を以下のように記している。

> 私たちは、黒人のクィアやトランスの人々、障害、非正規雇用者、書類なき者、女性、そしてジェンダースペクトラムに沿った全ての黒人の命を主張する。私たちのネットワークは、黒人解放運動

において疎外されてきた人々を中心としている。[26]

しかしコリンズによると、何をもってインターセクショナリティとするかの定義は明確ではないと言う。[27]

インターセクショナリティという用語自体は、2010年代から始まる第4波フェミニズムで盛んに使われるようになったが、ブラック・フェミニズムにおいては長く用いられてきた概念である。インターセクショナリティを初めて用語として提唱したのは、アメリカの法学研究者であるキンバリー・クレンショー（Kimberlé Crenshaw, 1959-）であったと言われている。[28]

クレンショーは、黒人女性が差別されているのは、しばしば「人種差別」や「性差別」という法的なカテゴリーにきちんと収まらない方法であると主張した。なぜなら黒人女性の差別は、「人種差別」や「性差別」という法的なカテゴリーに収まらず、人種差別と性差別の両方が組み合わさったものであることが多いからである。しかし、法制度は一般的に、白人を含むすべての女性が直面している不正を暗黙のうちに言及した上で、「性差別」が定義されている。一方で「人種差別」は、男性を含む黒人やその他の人々が直面する不正を指すものと定義されている。この枠組みによって、黒人女性は法的に「見えない」存在となり、法的手段に訴えることすらできない状態となる。1989年にクレンショーがインターセクショナリティという言葉を発表してから、この言葉は広く使われるようになった。というのも黒人女性が直面している複数の抑圧を同時に経験していることを言い表すことを可能にしたからであった。この概念は、これまで「連動する抑圧（interlocking oppressions）」、「同時多発的な抑圧（simultaneous oppressions）」、「二重の危険（double jeopardy）」、「三重の危険（triple jeopardy）」など様々な言葉で表されてきた。[29]

よって自身もブラック・フェミニストであるクレンショーは、それ

までの多くのブラック・フェミニストたちの活動や思考の歴史を引き継ぎ、そこからインターセクショナリティという概念を引き出した。中でも、多くのフェミニストの尊敬を集め、大きな影響力を持つ活動家・研究者・作家であるアンジェラ・デイヴィス（Angela Davis, 1944-）の『女性・人種・階級（*Women, Race and Class*）』（1981年）がクレンショーのインターセクショナリティの理論的枠組みの土台となった。デイヴィスによると、黒人や先住民やその他の有色人種の女性、経済的に貧しい女性の経験する差別は、性別だけでなく、複合的な要因で構成されており、中産階級の白人フェミニストが求める、男女平等の議論から彼女たちは除外されてきたという。ジェンダー間の平等は、人種間の平等や経済的な平等と同時に達成されなければならないとデイヴィスは説いた[30]。クレンショーのインターセクショナリティ、すなわち人種やジェンダーだけでなく、階級、セクシュアリティなどをめぐる複数の抑圧が互いに交差して差別構造を形づくっているのだとする視点は、この発想の延長線上にある。

3．インターセクショナリティの問題点

黒人女性の経験に基づくブラック・フェミニズムの中から出てきたインターセクショナリティではあるが、問題点も指摘されている。例えば、ジェニファー・C・ナッシュ（Jennifer C. Nash）は、インターセクショナリティ研究における以下の4つの問題（①方法論の欠如、②典型的な対象としての黒人女性、③定義の曖昧性、④経験主義に基づく正当性）に焦点をあて、インターセクショナリティを支える前提条件を議論している。

まず①方法論の欠如については、女性学などの研究において、主要なパラダイムとして登場したインターセクショナリティの方法論やその定義が明確ではない点をナッシュは指摘する[31]。その方法論や定義が曖昧であるがゆえに、その考え自体の信ぴょう性を危ぶむことになる。

次に②の典型的な対象としての黒人女性については、クレンショーの議論は、黒人女性が人種／ジェンダーのカテゴリーに準拠できないことを利用して、カテゴリー自体の不備を示そうとしているが、それによって逆に黒人女性のアイデンティティが人種とジェンダーによってのみ構成されているという概念を補強しているとナッシュは指摘する。[32] つまり、クレンショーが黒人女性に注目したのは、彼女たちが「多重負担者（multiply burdened）」だからであり、人種やジェンダーを越えた「多重負担（multiple burdens）」の形態（あるいは特権と負担の交錯）を検討することが難しくなっているとした。

さらに③定義の曖昧性については、フェミニストの中には、インターセクショナリティとは、人種・ジェンダー・セクシュアリティ・階級などの相互作用によって構成される全ての主体を指すと主張する者もいるが、インターセクショナリティに関する研究の圧倒的多数は、多方面で疎外されている特定の立場を研究対象としている。[33] ナッシュは、この理論的論争によって、インターセクショナリティが周縁化された立場のための理論なのか、それとも一般化されたアイデンティティのための理論なのか明確になっていないと指摘する。

最後の④経験主義に基づく正当性は、黒人女性の経験に理論的に依存している点が指摘されている。[34] フェミニストや反人種主義の理論の中で排除の問題を強調しようとする一方で、黒人女性は一体化した一枚岩として扱われている。つまり、「黒人女性」を「白人」と「黒人男性」の両方に対抗するカテゴリーとして提示するために、階級やセクシュアリティを含む黒人女性間の差異が曖昧にされているのである。例えば、黒人女性の性的暴行や家庭内暴力の経験が、人種とジェンダーの両方によって媒介されていることを指摘したクレンショーの分析は、これらの経験が階級、国籍、言語、民族、そしてセクシュアリティによっても複雑化されていることに注意を向けていない。人種やジェンダーを超えた要因が、黒人女性の経験をどのように形成する

かに目を向けないことは、有色人種女性の実際の経験の多様性を捉えるにはインターセクショナリティが不充分であることを示している。

ナッシュは、インターセクショナリティに見られる4つの緊張関係を批判的に分析した。とはいえ、ナッシュの分析は、インターセクショナリティ研究を弱体化させようと試みるものではなく、フェミニストや反人種主義の研究者が、インターセクショナリティの理論的、政治的、方法論的可能性を広げていくことを目指すものである。

4．インターセクショナリティの観点から見るアイダ・B・ウェルズ

近年、インターセクショナリティは日本においても注目を集める概念になっている。冒頭で述べた筆者の研究対象であるアイダ・B・ウェルズを含めた黒人女性の経験を分析するのに、インターセクショナリティの視点は有効である。ウェルズに関して言えば、彼女の活動や経験を分析していくにあたり、人種やジェンダー、家父長制が複雑に交差している側面が重要になっているためだ。ウェルズは、奴隷制下の南部にて、奴隷の両親の元に生まれ、黒人に対する人種隔離政策であるジム・クロウ体制を経験した。また、革新主義期の白人中産階級の女性改革者とは異なる視点や方法で、セツルメント活動を行い、さらに北部シカゴにおける黒人運動の中でも主流派に属さなかったウェルズは、当時の社会改革運動における、人種やジェンダー、家父長制規範から逸脱する存在となっていた。このようにウェルズの生きた経験を分析するにはインターセクショナリティは有効である。

一方で、私たちは概念の時代性というものも念頭においておく必要があるだろう。インターセクショナリティを提唱した、キンバリー・クレンショーや、理論的枠組みを提供したアンジェラ・デイヴィス、パトリシア・ヒル・コリンズらみなは公民権運動や黒人女性解放運動を生き抜いてきた人々である。インターセクショナリティという概念には、この時代を生きた黒人女性の間の問題意識や感情が深く埋め込

まれている。一方、公民権運動以前の時代に生きた黒人女性の人種差別や性差別が重なり合っていた現実の経験の解釈はこれとは異なるものがあった。例えばウェルズは、南部のジム・クロウ制度の下で市民権の責任を負う能力に欠ける存在とされた黒人男性を、黒人全体の社会的向上のための重要なエージェントであると考えていた。また公民権世代の少し前の世代の活動家であるファニー・ルウ・ヘイマー（Fannie Lou Hamer, 1917-1977）[35]は、当時の南部において、黒人男性は社会的に弱い立場にあり、黒人男性のエンパワーメントなしには黒人全体の社会的向上、つまりは権利を獲得できないと考えていた。[36] ウェルズやヘイマーに見られるように、公民権運動や黒人女性解放運動より前の時代を生きた黒人女性は、黒人男性の社会的向上によって、黒人女性も社会的に向上できると考えていた。しかし、彼女たちの経験を分節化する概念は当時存在しておらず、またそれを全面的に出す状況は黒人社会におそらくなかったのではないだろうか。つまり、こうした概念の時代性という点も考慮しながら、黒人女性の経験をより複層的に分析していくために、インターセクショナリティの概念を用いていくことが重要なのである。

おわりに

メインストリームのフェミニズムに疑問を呈する形で登場したブラック・フェミニズムの歴史を土台にし、インターセクショナリティという視点が概念化された。2020年に再燃したBLM運動でも見られた、このインターセクショナリティという概念は、人種、階級、ジェンダー、セクシュアリティなどが相互に作用し合い、こういった交差した複数の抑圧がどのように個人に影響を及ぼすのかを洞察するものである。キンバリー・クレンショーによって用語化されたインターセクショナリティは、黒人女性を分析するにあたって、有効なツールとなった。しかし、インターセクショナリティには、既にいくつかの問

題点が指摘されている。さらに本稿において、筆者は概念の時代性というものも指摘した。

近年のBLM運動の高まりと共に、インターセクショナリティは大きな広がりを見せている概念ではあるが、その概念の歴史的な負荷を、今一度意識しながらインターセクショナリティの理論や方法論を豊かにしていく必要があるだろう。

【参考資料】

Black Lives Matter（https://blacklivesmatter.com/）.

Bowean, Lolly, “With Congress Parkway now renamed Ida B. Wells Drive, Chicago has its first major street named for a black woman, ”*Chicago Tribune*, Feb 11, 2019 (https://www.chicagotribune.com/news/ct-met-chicago-ida-b-wells-street-name-congress-parkway-20190211-story.html　最終アクセス日2021年12月15日).

Collins, Patricia Hill, “Defining Black Feminist Thought,” *The Feminist eZine* (http://www.feministezine.com/feminist/modern/Defining-Black-Feminist-Thought.html　最終アクセス日2021年12月8日).

_____“Intersectionality’s Definitional Dilemmas,”in *Review of Sociology*, vol. 41 (2015), pp. 1-20.

Crenshaw, Kimberlé, “Demarginalizing the Intersection of Race and Sex: A Black Feminist Critique of Antidiscrimination Doctrine, Feminist Theory and Antiracist Politics,” in *The University of Chicago Forum*, vol.140 (1989).

Dickerson, Caitlin, “Overlooked,” *The New York Times*, Mar 8, 2018 (https://www.nytimes.com/interactive/2018/obituaries/overlooked.html　最終アクセス日2021年12月15日).

hooks, bell, *ain’t I a woman: black women and feminism* (London: Routledge, 2015) p.105（ベル・フックス[大類久恵監訳、柳沢圭子訳]『アメリカ黒人女性とフェミニズム　ベル・フックスの「私は女ではないの？」』明石書店、2010年）.

Federal Art Project, *Dedication Ceremonies -Ida B. Wells Homes* (Chicago: WPA Art Project, 1940).

Nash, Jennifer C., “Re-thinking Intersectionality,”in *Feminist Review*, no.89 (2008), pp. 1-15.

Popkin, Susan J., Cunningham, Mary K. & Woodley, William T., *Residents at Risk: A Profile of Ida B. Wells and Madden Park* (Washington D. C.: Urban Institute, 2003).

Rhodan, Maya,"Smithsonian Offers Sneak Peek of Museum of African-American History," in *TIME*, May 13, 2016（https://time.com/4329075/smithsonian-museum-african-american-history/ 最終アクセス日2021年12月15日）.

Risen, Cray, "bell hooks, Pathbreaking Black Feminist, Dies at 69,"*The New York Times*, Dec 15, 2021（https://www.nytimes.com/2021/12/15/books/bell-hooks-dead.html　最終アクセス日2021年12月20日）.

Smith, Sharon, "Black Feminism and Intersectionality," in *International Socialist Review*, (Winter 2013-2014) p. 3.

The Associated Press, "bell hooks, groundbreaking feminist thinker, dies at 69," *Chicago Tribune*, Dec 15, 2021（https://www.chicagotribune.com/nation-world/ct-aud-nw-bell-hooks-20211215-mxbyagfsujamznmebdkrsvkmoy-story.html　最終アクセス日2021年12月20日）.

The Ida B. Wells Memorial Foundation (https://ibwfoundation.org/ 最終アクセス日2021年12月7日).

荒木和華子、福本圭介編著『帝国のヴェール　人種・ジェンダー・ポストコロニアリズムから解く世界』明石書店、2021年。

岩本裕子『物語　アメリカ黒人女性史（1619-2013）絶望から希望へ』明石書店、2013年。

岡本美貴「アイダ・B・ウェルズとニグロ・フェローシップ・リーグから見る革新主義期シカゴの人種問題」『法政大学大学院紀要』87号、(2021年)、86-99頁。

松本昇、三石庸子、君塚淳一、高橋明子、中野里美、野川浩美、寺嶋さなえ、高見恭子編『アフリカ系アメリカ人ハンディ事典』南雲堂フェニックス、2006年。

ギディングス、ポーラ（河地和子訳）『アメリカ黒人女性解放史』時事通信社、1989年。

ケンダル、ミッキ（川村まゆみ訳）『二重に差別される女たち　ないことにされているブラック・ウーマンのフェミニズム』DU BOOKS、2021年（Mikki Kendall, Hood Feminism [New York: Viking Press, 2020]）。

コリンズ、パトリシア・ヒル、モルゲ、スルマ（小原理乃訳、下地ローレンス吉孝監訳）『インターセクショナリティ』人文書院、2021年（Patricia Hill Collins & Sirma Blige, *Intersectionality* [Cambridge: Polit Press, 2020]）。

デイヴィス、アンジェラ（フランク・バラット編、浅沼優子訳）『アンジェラ・

デイヴィスの教え　自由とはたゆみなき闘い』河出書房新社、2021年（Angela Y. Davis, *Freedom is a Constant Struggle: Ferguson, Palestine, and the Foundation of a Movement* [Chicago: Haymarket Books, 2016]）。

注

1　Maya Rhodan,"Smithsonian Offers Sneak Peek of Museum of African-American History," in *TIME*, May 13, 2016（https://time.com/4329075/smithsonian-museum-african-american-history/ 最終アクセス日2021年12月15日）.

2　Caitlin Dickerson, "Overlooked," *The New York Times,* Mar 8, 2018 (https://www.nytimes.com/interactive/2018/obituaries/overlooked.html　最終アクセス日2021年12月15日).

3　The Ida B. Wells Memorial Foundation (https://ibwfoundation.org/ 最終アクセス日2021年12月7日).

4　Federal Art Project, *Dedication Ceremonies -Ida B. Wells Homes* (Chicago: WPA Art Project, 1940); Susan J. Popkin, Mary K. Cunningham & William T. Woodley, *Residents at Risk: A Profile of Ida B. Wells and Madden Park* (Washington D. C.: Urban Institute, 2003).

5　Bowean Lolly, "With Congress Parkway now renamed Ida B. Wells Drive, Chicago has its first major street named for a black woman, "*Chicago Tribune*, Feb 11, 2019 (https://www.chicagotribune.com/news/ct-met-chicago-ida-b-wells-street-name-congress-parkway-20190211-story.html　最終アクセス日2021年12月15日).

6　Ibid.

7　アイダ･B･ウェルズのセツルメント活動については拙稿を参照。岡本美貴「アイダ・B・ウェルズとニグロ・フェローシップ・リーグから見る革新主義期シカゴの人種問題」『法政大学大学院紀要』87号、（2021年）、86-99頁。

8　Patricia Hill Collins, "Defining Black Feminist Thought," *The Feminist eZine* (http://www.feministezine.com/feminist/modern/Defining-Black-Feminist-Thought.html　最終アクセス日2021年12月7日).

9　人種や、ジェンダー、経済、政治がどのように絡み合っているかを探求し、女性の権利のための闘いは、労働者階級の女性や黒人女性の多様な経験を考慮に入れなければならないと主張したフェミニストであり、社会活動家である。1970年代から、30冊を超える著書を出版した。2021年12月15日に69歳で亡く

なった。The Associated Press, “bell hooks, groundbreaking feminist thinker, dies at 69,” *Chicago Tribune*, Dec 15, 2021（https://www.chicagotribune.com/nation-world/ct-aud-nw-bell-hooks-20211215-mxbyagfsujamznmebdkrsvkmoy-story.html　最終アクセス日2021年12月20日）; Cray Risen,“bell hooks, Pathbreaking Black Feminist, Dies at 69,”*The New York Times*, Dec 15, 2021（https://www.nytimes.com/2021/12/15/books/bell-hooks-dead.html　最終アクセス日2021年12月20日）.

10　bell hooks, a*in't I a woman: black women and feminism* (London: Routledge, 2015) p.105（ベル・フックス[大類久恵監訳、柳沢圭子訳]『アメリカ黒人女性とフェミニズム　ベル・フックスの「私は女ではないの？」』明石書店、2010年）.

11　松本昇、三石庸子、君塚淳一、高橋明子、中野里美、野川浩美、寺嶋さなえ、高見恭子編『アフリカ系アメリカ人ハンディ事典』南雲堂フェニックス、2006年、267頁。

12　bell hooks, *ain't I a woman: black women and feminism*, p. 159.

13　テネシー州メンフィスの裕福な黒人家庭に生まれ、当時としては異例の高い教育を受け、女性参政権運動の活動家として活躍した。1896年に全米黒人女性協会（The National Association of Colored Women）の創設者の1人となり、初代会長に就任した（松本昇、三石庸子、君塚淳一、高橋明子、中野里美、野川浩美、寺嶋さなえ、高見恭子編『アフリカ系アメリカ人ハンディ事典』、312頁）。

14　ニューヨーク州の田舎町ブロックポートにおいて、町唯一の黒人家庭に生まれた。中産階級の家族の元に生まれた彼女は、ボストンにある名門音楽大学ニューイングランド音楽院を卒業し、1984年にシカゴ女性クラブ（Chicago Woman's Club）の会員となった初の黒人女性であった。また、1893年のシカゴ万国博覧会の管理委員会に、黒人が正式に参加できるよう働きかけた人物でもある（岩本裕子『物語　アメリカ黒人女性史（1619-2013）絶望から希望へ』明石書店、2013年、119頁、ポーラ・ギディングス[河地和子訳]『アメリカ黒人女性解放史』時事通信社、1989年、83頁）。

15　ノースカロライナ州ローリーにて、奴隷の母の子供として生まれた。1964年に黒人女性として4人目となるソルボンヌ大学で博士号を取得した。1892年に発表された著書『南部からの声（*A Voice from the South: By a Black Woman of the South*）』は、ブラック・フェミニズムの始まりとして位置づけられ、しばしばクーパーは「ブラック・フェミニズムの母」と称された（岩本裕子『物

語　アメリカ黒人女性史（1619-2013）絶望から希望へ』145-146頁）。

16　bell hooks, *ain't I a woman: black women and feminism*, pp. 175-176.

17　白人に対する黒人の優越性、白人支配からの解放、黒人の自立を説く思想。

18　パトリシア・ヒル・コリンズ、スルマ・モルゲ（小原理乃訳、下地ローレンス吉考監訳）『インターセクショナリティ』人文書院、2021年、116頁（Patricia Hill Collins & Sirma Blige, *Intersectionality* [Cambridge: Polit Press, 2020]）。

19　同上書、135頁。

20　1991年に弁護士アニタ・ヒルが、当時、史上2人目の黒人最高裁判事候補であったクラレンス・トマス（Clarence Thomas）から受けたセクハラを暴露した。トマスが承認を得るための議会公聴会において、ヒルがトマスによるセクハラについて証言し、ムーブメントを起こした。

21　ミッキ・ケンダル（川村まゆみ訳）『二重に差別される女たち　ないことにされているブラック・ウーマンのフェミニズム』DU BOOKS、2021年、331頁（Mikki Kendall, Hood Feminism [New York: Viking Press, 2020]）。

22　同上書、22頁。

23　Patricia H. Collins, "Intersectionality's Definitional Dilemmas"in *Review of Sociology*, vol. 41 (2015), p. 1; パトリシア・ヒル・コリンズ、スルマ・モルゲ『インターセクショナリティ』16頁。

24　Ibid.

25　パトリシア・ヒル・コリンズ、スルマ・モルゲ『インターセクショナリティ』18頁。

26　Black Liver Matter (https://blacklivesmatter.com/ 最終アクセス日2021年12月7日)。

27　Patricia H. Collins, "Intersectionality's Definitional Dilemmas," p. 1.

28　Kimberle Crenshaw, "Demarginalizing the Intersection of Race and Sex: A Black Feminist Critique of Antidiscrimination Doctrine, Feminist Theory and Antiracist Politics" in *The University of Chicago Forum*, vol.140 (1989).

29　Sharon Smith, "Black Feminism and Intersectionality," in *International Socialist Review*, (Winter 2013-2014) p. 3.

30　アンジェラ・デイヴィス（フランク・バラット編、浅沼優子訳）『アンジェラ・デイヴィスの教え　自由とはたゆみなき闘い』河出書房新社、2021年、22頁（Angela Y. Davis, *Freedom is a Constant Struggle: Ferguson, Palestine, and the Foundation of a Movement* [Chicago: Haymarket Books, 2016]）。

31　Jennifer C. Nash, "Re-thinking Intersectionality,"in *Feminist Review*, no.89

(2008), pp. 4-5.

32　Ibid, p.7.

33　Ibid, pp. 9-10.

34　Ibid, p.9.

35　ミシシッピ州モンゴメリー郡の分益小作人の元に生まれ、44歳で公民権運動に出会った。1964年に白人のみの民主党から拒絶されたため、ミシシッピ自由民主党（Mississippi Freedom Democracy Party）を結成し、副代表に着任した。（西崎緑「黒人女性が経験した人種差別の交差性　－ファニー・ルウ・ヘイマーのスピーチを通して」荒木和華子、福本圭介編著『帝国のヴェール　人種・ジェンダー・ポストコロニアリズムから解く世界』明石書店、2021年、100-101頁。）

36　同上書、109頁。